

月例研究会（2020年11月25日）

大原社会問題研究所 100年史を読む

榎 一江・伊東林蔵

本報告は、2019年度法政大学大原社会問題研究所叢書『大原社会問題研究所100年史』（法政大学出版局、2020年）の刊行を記念し、企画された。具体的には、編纂実務を担った研究員らによる報告と二村一夫名誉研究員によるコメントから構成された。

榎報告「100年史編纂を終えて」は、100年史編纂の経緯を確認し、2015年11月から定期的に開催した100年史編纂委員会／100周年記念事業準備委員会の活動を振り返った。また、本書の構成について、序章から第3章までが『大原社会問題研究所五十年史』をもとに叙述されたのに対し、第4章は二村一夫「大原社会問題研究所の70年」（『大原社会問題研究所雑誌』363号）、第5章は二村一夫・早川征一郎「大原社会問題研究所の80年」（『大原社会問題研究所雑誌』494・495号）に依拠していること、第6章と終章は「大原社会問題研究所各年度の歩み」をもとに新たに執筆されたことが報告された。本書刊行後、敗戦後法政大学と合併してからの市ヶ谷キャンパス時代の叙述が薄いといった意見が寄せられたことを紹介し、今後の課題とした。また、巻末資料として掲載した「大原社会問題研究所100年の歩み」に誤りが見つかったため、『大原社会問題研究所雑誌』745号に修正版を掲載したことも報告された。

伊東報告「大原社会問題研究所出版目録の作成について」は、すでにウェブ上で公開されている出版目録に対し、改めて現物との照合作業

を行い、修正を行ったことが報告された。

二村一夫名誉研究員のコメントでは、前掲「大原社会問題研究所の70年」で書かなかったことについて、1969年の全共闘による大学封鎖のエピソードなどが紹介された。また、100年史への要望として、①予算決算等の財政情報や寄付金や助成金の一覧、②より実態を反映した所員名簿、③初期研究員の報酬額、④多摩移転時の文書等の掲載が挙げられた。また、戦後、大原社会問題研究所を離れた研究員の活動についても明記して評価すべきとの見解が示された。

加えて、1965年に入職して長く研究所の司書を務めた是枝洋元職員からは、コンピュータやデータベース導入時の貴重なお話とともに、どのように研究所が資料を集めていったのかという記録が必要とのご指摘をいただいた。

ところで、何をどのように記録として残すかは編纂委員会の方針に基づいて決定されている。100年史編纂委員会では、通史編を2019年度大原社会問題研究所叢書として刊行する一方、資料編についてはウェブ上で公開する方針が立てられている。そのため、100年史刊行を以て編纂事業を終了させるのではなく、引き続き資料収集を重ね、資料編を充実させることが可能との展望を得た。さしあたり、元職員のインタビュー記録を蓄積する作業を行う予定である。

なお、2020年度の月例研究会は、5月以降、オンライン開催が定着し、遠隔地からの参加者も初めての参加者も気軽に参加できるようになった。今回は特に、現役の職員や元職員の参加もあり、有意義な議論ができた。今後の活動につなげていきたい。

（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所専任研究員）

（いとう・りんぞう 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）